

私の軍隊生活

滋賀県 山崎 文治

私は大正七（一九一八）年二月十八日、滋賀県甲賀町水口字林口、商家の長男として生まれ、小学校を卒業すると商いの修業と言うことで、京都の大きな店に見習いとして奉公していたが、その後、ここを辞めて食品関係の会社に勤務していた。

昭和十三（一九三八）年七月、徴兵検査で甲種合格となり、十二月一日入隊という通知をもらった。当時は、出征兵士となれば男子としての最高の名誉のように思っていたし、世間の人々も誉め称えていた時代であった。

家の玄関には「出征兵士の家」と看板が貼られ、出立の日などには町内総出で、日の丸の小旗を片手に「万歳！ 万歳！」で大勢の見送りの方々が駅まで送ってくれた。現役兵として京都歩兵第九連隊に入隊しました。私は第十中隊第一班に編入

され、いよいよ軍隊生活の第一歩を踏み出しました。

起床と同時に点呼、食事の仕上げ、食事が終わると食缶返上、演習整列と、目まぐるしい日課の毎日でした。また内務班の教育も厳しく、一日演習やら銃剣術等の教育が終わると、「初年兵、整列！」といわれ、古参兵からビンタの連続でした。特に私の班の古参兵に、二・二六事件に関与したというので、元曹長から上等兵に降格された人がいて、この人がいつも大暴れしていて誰も手がつけられない状態でした。

ある日曜日のことです。外出から帰って来たら酒に酔って何が気にさわったのか、室内の真っ赤に燃えているストーブを蹴飛ばしたのです。床一面に火の粉がちらばって大騒ぎ、後の始末は我々初年兵の仕事でした。幸い火災の大事には至らなかったが、元は曹長さん、誰も手がつけられない横暴ぶりでした。しかし私達初年兵に対しては別

に私的制裁等の手は出しませんでした。

毎日の訓練の中で銃剣術で胸部を突かれ、胸部疾患となり、京都陸軍病院に入院することになりました。さらに三重県原陸軍病院に転院となり、治療に専念した結果退院することができました。

このような体では第一戦での活躍が不安になったので主計下士官を志望しましたが駄目でした。

昭和十五年十二月二十一日、歩兵第一〇九連隊補充要員として十二月二十二日京都の連隊を出発、呉港より乗船、上海に上陸、揚子江（長江）を船で遡航して連隊本部のある湖江に到着しました。到着の申告をして各中隊ごとに分かれ、それぞれの任地へ行きました。

私の中隊は應耐と言う部落に在りましたので、行軍にて約二十キロ位歩いて中隊に到着しました。各班ごとに宿舎に割り当てられましたが、この兵舎は元華族の家で部屋の数が二階と共に二十二、三はある大きな家です。こうしていよいよ第一線での生活となったのです。

付近にはいつ敵が襲撃して来るか分からないと言う。各人はいつでも対処できるように心掛けよと命令されていました。そして毎日付近の警備に当たったり、討伐隊を作り、付近の討伐に参加しておりました。討伐に出る時は軽装で、高い山のあちこちと、約八里位は歩くので汗だくだくで、帰りは日が暮れて真っ暗になります。宿舎に帰って着替えはするのですが風呂がある訳でなく、寒さの中を寝る始末でした。

私は昭和十五年十一月、除隊となり、懐かしい故郷に帰り、暮れには結婚して男の子が生まれたのですが、昭和十六年十二月八日、日本は米英に對し宣戦布告し、大変な事態となりました。召集されるものと覚悟をしていました。ついに昭和十七年三月、その召集令状が来て、五月に再び支那大陸行となったのです。

昭和十八年一月、大別山作戦に参加、終了後応山駐屯地に車で輸送されました。

私もこの時点から前の胸部疾患が再発して陸軍病院に入院、内地後送となりました。京都陸軍病院に転送された私はここで約二年間療養に励み、昭和二十年十月、病院で敗戦のニュースを聞きながら退院、帰宅することとなったのです。

このような軍隊生活で、第一線で尊い命を失った数多くの戦友を想い断腸の念を禁じ得ないのです。戦争はすべてを犠牲にし、すべてを無にし何も得るものもありません。悲劇は悲劇を生み、悲嘆に暮れるのみです。

今の平和日本を永久に守って行かねばならないと、これから育ち行く若人に願うものです。